

# 大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：小林 大介（臨床心理研究コース）

<b>■ 研究題目</b>
親密な第三者の存在は高愛着不安者の交際相手への攻撃行動を低減しうるか
<b>■ 研究代表者・分担者 氏名</b>
小林 大介（臨床心理研究コース）（代表者） 亀倉 大地（臨床心理研究コース） 川合 智也（臨床心理学コース） 石川 理恵（臨床心理学コース）
<b>■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）</b>
<p style="text-align: center;"><b>問題と目的</b></p> <p>本邦において、恋愛関係にある男女間での DV であるデート DV が注目されている。内閣府（2017）の調査では、調査対象者全体の 16.7%が交際相手からの暴力を経験しているという報告もある。このような暴力をもたらすパーソナリティ特性として、人から見捨てられることに対する不安（以下、愛着不安とする）の高さが指摘されている（金政・浅野・古村，2018）。しかし、本邦におけるこれまでの暴力に関する研究を見ると、暴力をもたらす要因を明らかにしようとするものがほとんどであり、暴力を止める手段については検討が行われてこなかった。このような側面を踏まえ、本研究では、愛着対象（本研究では交際相手を指す）との関係性に危機が生じた際に行われる対処行動の 1 つである愛着行動（中尾・加藤，2006）の存在に着目した。愛着行動とは、愛着が脅かされた際に、誰かのところに行き、安心感を求める行動である。愛着不安の高まりを、交際相手以外の第三者を通して解消するという点に関しては、これまで研究が行われていない。以上の点を踏まえ、本研究では、愛着不安が高い者が交際相手との関係で危機状況に陥った際、交際相手以外の第三者へと愛着行動をすることにより、交際相手への攻撃行動を抑制することができるかどうかを検討する。</p> <p style="text-align: center;"><b>方法</b></p> <p><b>回答者と実施方法</b></p> <p>楽天インサイト株式会社によるウェブ調査において、スクリーニング調査を行い、現在交際中の大学生・専門学生の参加者を求めた。その後、調査に協力の意志を示した 18 歳</p>

から22歳の大学生・専門学生に対して調査を実施した。最終的に、男性99名、女性100名の計199名(平均年齢20.80歳; $SD=1.14$ )を分析の対象とした。平均交際期間は、19.82ヵ月( $SD=14.80$ )であった。なお、調査時期は2019年12月であった。

#### 調査内容

**フェイスシート** 性別、年齢、交際期間を尋ねた。

**愛着不安の測定尺度** 回答者の愛着不安を明らかにするために、中尾・加藤(2004)が作成した一般他者版のthe Experiences in Close Relationships Inventory(以下、ECR-GOとする)を使用した。ECR-GOの愛着不安に関する項目は18項目からなるが、本研究では、回答者の負担を考慮して、中尾・加藤(2004)で愛着不安の因子に高い負荷量を示していた10項目を採用した。7件法で回答を求め、得点が高くなるほど、愛着不安が高いと判断される。

**愛着行動の測定尺度** 交際相手との葛藤時における第三者への愛着行動を測定するために、中尾・加藤(2006)が作成したAdult Attachment Behavior Scale(以下、AABSとする)を使用した。本研究では、AABSの中でも直接的愛着行動を測定する「近接性維持」5項目、「素直な伝達」4項目を採用した。本来の教示は交際相手との葛藤場面を含む、様々な状況を想定していたが、本研究では、交際相手との葛藤場面に限定した。7件法で回答を求め、得点が高くなるほど、交際相手との葛藤時に第三者への直接的愛着行動を行っていると判断できる。また、併せて、直接的愛着行動を行う際に第三者を想定できたかどうか、想定できた場合は想定した人数と、その人物との関係性の記入を求めた。

**交際相手への攻撃行動尺度** 小林・安藤・斎藤・進藤・関口(2017)が作成した交際相手への攻撃行動尺度7項目を使用した。具体的には、「あなた自身の現在の恋人に対しての関わり方」について尋ね、「私は、腹を立てたとき、なぐるフリをする」、「私は、腹を立てたとき、大声でどなる」、「私は、腹を立てたとき、長い期間無視をする」、「私は、腹を立てたとき、すぐに別れ話をもちだす」、「私は、自分の意見や都合に合わないからといって、イライラをぶついたり怒ったりする」、「私は、わざと嫌な呼び方で呼んだり、馬鹿にしたり見下したような言い方をする」、「私は、相手の行動を制限したり、監視したりする」の7項目によって構成されている。もともとの尺度は6件法だが、本研究では、片岡(2005)等の暴力研究を踏まえ、等間隔性を考慮した3件法で回答を求めた。得点が高くなるほど、交際相手へ攻撃行動を行っていると判断できる。

#### 倫理的配慮

ウェブ調査による質問票の表紙には、デートDVの具体的経験に関する内容を含んでいること、本研究への協力は強制ではないこと、思い出したくない場合や考えたくない場合、気分を害し、それが長引いた場合等には、回答を途中でやめること、調査は匿名であり、個人の情報が外部に流出することがないことを記載した。本研究は、東北大学大学院教育

学研究科の倫理委員会より、承認を得ている（承認 ID：19-1-017）。

### 結果と考察

まず、本研究で使用した各尺度の記述統計を Table1 に示す（各尺度については、項目平均点を尺度得点としている）。交際相手への攻撃行動を行った経験のある人物は、135名（65.8%）で歪んだ分布となっている。しかし、これは、DV やストーキング等暴力に関する研究においては、共通している分布となっているため（参考として、片岡，2005），分布の特徴として捉え、この点からの項目の除外は行わなかった。また、直接的愛着行動を第三者に行うことを想定できた人は148名（74.4%）で、直接的愛着行動を行う際、想定した相手の平均人数は1.76人（ $SD=1.00$ ）であった。想定した人との関係性は、男女ともに最も多いのが「異性友人」（男性 52.5%；女性 41.0%）で、次に「同性友人」（男性 24.2%；女性 39.0%）であった。これは、青年においては、友人が「安全な避難場所」，「安全基地」の愛着機能を担っているという片岡・園田（2010）の指摘と共通した結果となっている。

Table1 本研究で使用した尺度の記述統計（ $N=199$ ）

	<i>Max</i>	<i>mini</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	$\alpha$
愛着不安	6.60	1.00	3.18	1.35	.91
直接的愛着行動	7.00	1.00	4.32	1.46	.92
交際相手への攻撃行動	3.00	1.00	1.35	0.45	.88

#### 交際相手への攻撃行動の性差

交際相手への攻撃行動の性差を確認するため、男性 99 名と女性 100 名を対象に Mann-Whitney の  $U$  検定を用いて、交際相手への攻撃行動の合計得点の比較を行った。その結果、男女間で有意な差は見られなかった（ $U=4726.50$ ,  $n.s.$ ）。そのため、以降の分析では、男女で分けずに分析を行った。

#### 交際相手への攻撃行動と愛着不安、直接的愛着行動の関連

交際相手への攻撃行動と愛着不安、直接的愛着行動との相関係数を算出した。その結果、交際相手への攻撃行動と愛着不安の間に正の相関が見られた（ $\rho=.34$ ,  $p<.001$ ）。また、愛着不安と、直接的愛着行動の間に正の相関が見られた（ $\rho=.17$ ,  $p<.05$ ）。しかし、交際相手への攻撃行動と直接的愛着行動の間には相関が見られなかった（ $\rho=.07$ ,  $n.s.$ ）。

#### 愛着不安と直接的愛着行動が交際相手への攻撃行動に与える影響

愛着不安と直接的愛着行動が交際相手への攻撃行動に与える影響を検討するため、愛着不安と直接的愛着行動それぞれの平均値を基準に高群と低群に分類し、これらの群を独立

変数，交際相手への攻撃行動を従属変数とする Kruskal-Wallis 検定を行った。その結果の概略を Table2 に示す。

Table2 愛着不安と直接的愛着行動が交際相手への攻撃行動に与える影響

	愛着不安								$\chi^2$	多重比較
	高群				低群					
	直接的愛着行動									
	高群		低群		高群		低群			
	①N=54	②N=48			③N=45	④N=52				
交際相手への攻撃行動	1.46	0.48	1.46	0.44	1.33	0.52	1.18	0.28	20.22***	①>③, ①>④

\*\*\* $p < .001$

続いて，愛着不安と直接的愛着行動が行える第三者の存在が交際相手への攻撃行動に与える影響を検討するため，愛着不安の高低と直接的愛着行動が行える第三者の有無を独立変数，交際相手への攻撃行動を従属変数とする Kruskal-Wallis 検定を行った。その結果の概略を Table3 に示す。

Table3 愛着不安と第三者の存在が交際相手への攻撃行動に与える影響

	愛着不安								$\chi^2$	多重比較
	高群				低群					
	第三者の存在									
	あり		なし		あり		なし			
	①N=73	②N=29			③N=75	④N=22				
交際相手への攻撃行動	1.38	0.37	1.66	0.59	1.24	0.39	1.27	0.51	20.36***	①>③, ①>④, ②>③, ②>④

\*\*\* $p < .001$

Table2 の結果を見ると，愛着不安が高く，直接的愛着行動を多く行っている人が，愛着不安が低い人と比較して交際相手へ攻撃行動を行っていることが明らかとなった。続いて，Table3 の結果を見ると，直接的愛着行動ができる第三者の存在の有無に関わらず，愛着不安の高さが交際相手への攻撃行動に影響を与えることが明らかとなった。

以上の点を踏まえると，本研究では，愛着不安が高い人が交際相手との葛藤場面に遭遇した際，交際相手以外の第三者へ直接的愛着行動を行うことや，第三者の存在を想定することは，交際相手への攻撃行動を抑えることに対しては影響を与えないことが示唆された。愛着不安と直接的愛着行動の関連からも，愛着不安が高い人にとって，交際相手との葛藤場面での第三者への直接的愛着行動は選択されやすく，葛藤に対する対処行動としての機能を持っていると考えられる。しかし，本研究では，このような対処行動が交際相手への攻撃行動に影響することは確認されなかった。また，本研究の課題として，交際相手との葛藤時に，交際相手と直接的なやり取りによって葛藤を対処しているパターン（越智，2016）を想定しなかったことがあげられる。この点は，今後より慎重な検討が必要だろう。